

# 大般泥洹經と四卷楞伽、大乘二經の相互関係の再考察

常盤 義伸

二〇〇七年発表の小論「涅槃經が楞伽經の主な表現主体ではなかったか」(臨濟宗妙心寺派『教学研究紀要』第5号所収)で筆者は、両經の「不食肉章」の中心思想が、先行する前者から後者への展開であることは自明の事柄であるにもかかわらず、後者、グナバドラ漢訳四卷本楞伽經(1990)の巻四(常盤分段120)第87偈で食肉を禁ずる大乘經典名に前者の名を挙げないのはただごとではない、それには理由があるはずだ、として、次の説明を提供した<sup>(1)</sup>。

『楞伽經』は、根本のところで『涅槃經』の涅槃觀を共有し、否、むしろそこから出発しながら後者の物語風な表現スタイルを離れて、すべてにおいて、論書とも違った経独自の、厳密な思想表現を意図したと考えられる。『涅槃經』の編集者たちが新たな構想のもとに『楞伽經』を開演した、と云つてもよいのではないか。<sup>(2)</sup>

筆者はこの引用文末の主語「『涅槃經』の編集者たち」を「『涅槃經』の編集者たちの意図を汲む人々」と改めた上で、両經の関係を新しく本論で考察したい。

(文中反復を避けて四卷本楞伽經、四卷楞伽、楞伽アヴァターラ經、楞伽經、また大般泥洹經、涅槃經などと適宜言い

換えます。)

東晋の仏教僧・法顕は、西暦三九九年、長安から十人の同行者とともに陸路はるばる戒律の書を求めてインドへの苦難の旅に出た。途中に留まる人、亡くなる人と、次第に人数が減りながら一行は、六年を経て中インドに到った。昔アシヨカ王の庇護の下にあった都パータリプトラで法顕は、律など部派仏教のテキストの他に大乘の涅槃經のテキストを入手し、そこで三年間梵語の学習をした。同行者すべてを失った法顕は船で独りランカー(スリランカ(美しいランカー))は現在の国名、「ランカー」は歴史的名称。法顕訳語「師子国」に渡り、四一〜一二年の二年間首都アヌラーダプラに滞在した。そこには「王城の南七里」にマハー・ヴィハーラ(大寺)があり「三千僧が住する」が、それとは別に、「王城の北、大塔の辺」にあるアバヤ・ギリ・ヴィハーラ(無畏山寺)には、「五千の僧」がいる、と法顕は旅行記に記している。アヌラーダプラの無畏山寺は、大乘の学修に関心を寄せる僧たちが多く集まることで知られ、後に四卷本楞伽經の原本を西暦四三五年に中国に齎して漢訳した中インド出身の仏教僧グナバドラが中国に行くまで滞在したと考えられる寺院である。法顕は、四一四年に漸く帰国できて、四一八年に大乘の涅槃經(『大般泥洹經』(T12376))を漢訳したが、ランカーに滞在中さらに当時まだ漢土に伝わっていなかった經典や律のテキストを入手したことを記録している(『東晋沙門釈法顕自記遊天竺事』(T512085864786))が、楞伽經には全く言及しない。

しかし、大旅行の末に法顕がパータリプトラで入手しアヌラーダプラに持ち込んだ大乘の涅槃經の原テキストが、無畏山寺に集まっていた大乘の学修者たちの注意を惹かなかった訳がない。楞伽經の編集

は、実にこれらの人々による、法顕滞在中の、大乘の涅槃経原テキスト研究に端を発し、そして四三五年以前に編集は完了したと考えるのが最も自然なことに思われる。四卷本楞伽経の「不食肉章」第87偈が挙げる肉食を禁ずる大乘の經典名に『大般泥洹経』の名を含まない事態が生じたことは偶然的の過失ではなく、批判に耐える大乘仏教思想を打ち出しつつあると信じたこれらの人々の確固たる意図を示すものであった、と解したい<sup>(2)</sup>。

—

二つの術語「イツチャンティカ *ichchantika*」と「タターガタ・ガルバ *tahgatagarbha*」とは、大乘の両経に深く共通する思想を表し、涅槃経から楞伽経へと思想表現の展開を考えたと思われる人々の意図を探る上で、さしあたり最初に考慮すべき重要な概念である。以下、順次これらの術語について考察を進める。

1. 「イツチャンティカ」

法顕訳、大乘の『大般泥洹経』、問菩薩品第十七でブッダは言う、

「増上慢のイツチャンティカは何を以て本となす。経法を誹謗する不善の業、是を以て本となす。」

(T12892b.19-21)

「アルハットに似るイツチャンティカの者あり、是の諸衆生、方等を誹謗す。」(ibid. c.10-11)

同経最後の随喜品第十八の冒頭、死の時が迫ったブッダは、すべての人々に向って別れの偈、漢訳一句五文字、二句一行で三十一行を説く。拙訳で偈の初めと末尾の各数行を示す。

君たちは私のことを悲嘆してはいけません。諸仏についても同じことです、

「ブッダは涅槃する」と言っても、真理を言い尽くしてはいないのです。

如来とは常住のあり方です。永遠の最も安穩な境地です。

(中略)

「君たちすべての人々は深く正法を願うからこそ

如来が永遠にいなくなると思つて、憂え悲しみ愁嘆します。

今からは、如来が無常だなどと考へてはいけません。

如来の本性はとこしえで、変わることがありません。

如来の教へも修行者も、同じく皆、なくなるものではありません。

この偈の中間、第20—21行にいう、

イッチャンテイカが誰もみな、すべてのものの平等を悟るなら

如来は慈悲を捨てて永遠に涅槃に入りましょう。

と。大乘の涅槃經のブツダの以上に引用した言葉から、「イッチャンテイカ(欲求する人)とは、自身は悟りを求める仏弟子たちのトップにいるという誇りを抱きながら、大乘の、一切衆生は平等だ、とする教へは間違つていて大乘を誹謗する人を指す言葉で、大乘を志す人々からの批判の表現であることが知られる。

四卷楞伽の卷一(分段26)によれば、解脱を求める者たちの求めないありかた(icchāntīkāṃ anīcchāntīkāṃ)に二類あり、一類は、大乘菩薩藏經典類がシヤカムニの教へである經と律とに説かれる解脱の教へに一致しないとして排斥するものたちで、彼らは根拠のない非難をすることで一切の善根を放棄しているとして、楞伽經のブツダから批判される。他の一類は、すべての人々が完全な涅槃に至らない限り自身は涅槃することがないとするボサツ大士だとされる(T16487b)。この点で両經の趣旨は殆ど完全に一致

する。違いは、主役を演ずる説者が、如来の死を意味する「パリニルヴァーナ *parinivāna*」に入ろうとするシヤカムニ・ブツダから、永遠にニルヴァーナに入らないことを誓うボサツ・イツチャンティカを登場させるためにランカーに現れたアヴァターラ・ブツダに替わったことである。この違いにも拘わらず両経には、ランカーの上座部大寺派のように大乘仏教の登場を拒否する集団が歴史的に存在することに対する危機意識は、共通していたと言えよう<sup>(3)</sup>。

## 2. 「タターガタ・ガルバ」

法顯訳、大乘の『大般泥洹経』分別邪正品第十に、『如来蔵経』に言及する箇所がある。

また比丘ありて広く説かん、如来蔵経に言う、一切の衆生、皆仏性有り。身中に在りて無量の煩惱悉く除かれ滅せられおわらば、仏すなわち明らかに顕われん、イツチャンティカを除く、と  
(T12881b.23-26)。

同経、如来性品第十三にブツダが言う、

一切の衆生もまた是の如し。各々皆、如来の性あり、無量の煩惱に覆蔽され隠没されて自ら知るあたわず。如来、方便もて誘進、開化し、自身に如来性ありと知りて歡喜・信受せしむ (ibid.883b.11-13)。

実は『如来蔵経』は、経が「如来蔵」について言及すると主張する箇所は、すべて「如来性」の説明に終始する。筆者が二〇二一年発表の拙稿「如来蔵思想とは何か」(『禪文化研究所紀要』第三十五号)で述べたように、チベット語訳に見られる用法では、『如来蔵経』のこの語は衆生においては、衆生自身には知られぬまま存在する「胎児となった如来の法性」と解されており、それをこの経は「如来蔵」と称しているようである(四「如来蔵経」の如来蔵参照)。涅槃経では、如来が「如来性」の現前そのものであることが強調される一方、「如来蔵」の語は、「如来性」とは区別されている。

同經、四法品第八に見られる言葉 (T1287c,11-13)

真の解脱者は如来蔵に入る、諸の虚偽を離れ一切の有を断つ。解脱は是の如し。その解脱者は即ち是れ如来、仏の正法に入る。

同經、如来性品第十三、ブツダの長い偈を始める言葉 (ibid.,885b,23-24)

復た次に善男子、我れ当にさらに如来蔵に入ることを説くべし、と。即ち偈を説いて言う。

偈の中間の言葉 (ibid.,886a,1-2)

良医、善き方もて療し、平等性、安穩なり。

その平等性、是れを如来蔵と名づく。

偈の末尾の言葉 (ibid.,886b,18-23)

我れ衆生のために説く、一切の法は無我と。

凡愚、知るあたわずして謂う、仏は無我を説く、と。

慧者は了す、自性として我と非我とは無二と。

無量無数の仏は、是れを如来蔵と説く。

我れもまた一切の功德積聚の經に説く、

我と非我とは不二なりと。汝等善く受持せよ。

偈の直後の言葉 (ibid.,886b,24-25)

善男子、当に一切の功德聚の經を憶念すべし、我れ般若波羅蜜大經に不二を説けり。

彼に是の如く我と非我とは不二と説く。

大乘の『大般泥洹經』に見られる表現からは「如来蔵」の語義の詳細な理解は得られないが、そこに

おおむね把握される意図は、『如来藏經』には全く見られない。それは、むしろ、『如来藏經』の如来藏説を外道説として批判する四卷本楞伽經の「如来藏・藏識」思想(分段112)にきわめて近いと考えられる。

三

四卷楞伽は卷二冒頭(分段38)で、マハーマティが『如来藏經』の思想を外道説と批判し、ブツダがこれを空性を説くものと修正する場面を展開する。上に紹介した大乘の『大般泥洹經』の表現は、四卷楞伽のこの批判的な姿勢と重なるところがある。他方、般若思想を欠く『如来藏經』の外道の傾向は、「大乘の究極の論書 (mahāyānottarānta-sāstra)」と自称する『宝性分別 (ratnagotravibhāga)』、通称『宝性論』で論理的な体裁が整えられている<sup>4)</sup>。

仏教者の外道化傾向に強い危機意識を抱いたであろう楞伽經編集者たちは、大乘の『大般泥洹經』の説話的な表現形式では、仏教の外道化を防止するためには役に立たないと考えたに違いない。四卷楞伽卷三に二箇所、それぞれブツダの言葉だとして、ヴァスバンドゥ(世親)の『唯識三十頌』から各々、第20偈、第28偈と見られる表現の引用がある(分段98、100、これには理由がある。それらの引用は、仏教外のインド思想を批判する目的で行われているのである。この外教批判の姿勢は、楞伽經に一貫して見られる。

しかしまた、楞伽經の批判的な立場からすれば、大乘を拒否するランカーの上座部大寺派など部派仏教の保守的な姿勢は、大乘を志す立場とは根本的に相容れないと考えられる。卷三冒頭の本文(分段85)の後の二偈は、楞伽經のよって立つ姿勢を示す優れた表現である(T16.498a.9-12)。

わが乗は「大乘」にあらず、説にあらず、また文字にあらず、

諸諦にあらざる諸解脱にあらざる、現れた形を離れた境地、にあらざる。

しかも乗はマハーヤーナ、サマーディに自在、

種々の意生の身を、自在華莊嚴す。

以上のように見てくると、「不食肉」のテーマこそは、大乘の涅槃經と楞伽經とを結ぶ、具体的な共通のテーマだと思われる。従って、後者が大乘經典のうち不食肉のテーマを説く經典として前者の名を挙げないのは、いかにも不自然なことである。このテーマの歴史上の出現順位から言つて先行する最も有名な經典の名を挙げずに己の經名を挙げるといふ、ありえないことが起きているからである。偶然の過失でないとすれば、それは一体何のためなのか。

しかも、この事態には傍証がある。梁代の漢訳『文殊師利問經』は、肉食を禁ずる大乘經典として當時最も有名であつた涅槃經の名を挙げない四卷楞伽、卷四のこの第87偈に、出典を明らかにせず言及しているのである<sup>(5)</sup>。

#### 四

この難問を解くためには、両經に共通のもう一つの重要事項を考慮する必要がある。四卷楞伽が「不食肉章」に大乘の『大般泥洹經』の同じテーマを取り上げさらに詳細に叙述することによって先行經典の意図を継承している(註1参照)ことは確かだが、それだけでは十分とは言えない。この新經が他ならぬ大乘『大般泥洹經』の生まれ変わりだと信ずることを可能にする決定的要素は、実は四卷楞伽がその最重要テーマとする涅槃論である。ここで、全四巻を通じて見られるそれら六ヶ所の涅槃論の必要部分を漢訳訓読(筆者校訂)で取り上げることとする。



- (1) 卷一(分段2)、マハーマティがブツダに贈る讃歌の第五偈(T16:480b.6.8)。  
「あなたに」一切涅槃なし。涅槃の仏あることなく、  
仏の涅槃あることなし。覺と所覺を遠離し、  
若しは有、若しは無有、是の二、ことごとく俱に離る。
- (2) 卷一(分段19)、声聞たちの涅槃をブツダが批判する(T16:486c.22.25)。  
復た次に大慧よ、諸声聞は生死を妄想する苦しみを畏れて涅槃を求め、生死と涅槃との差別を知らず、一切の性の妄想の非性と未来の諸根境界の休息とに涅槃の想をなす。自覺聖智の趣なる藏識の転には非ず。
- (3) 卷二(分段56)、「涅槃とは何の呼び名か」(T16:492a.6.15)。  
爾の時、大慧菩薩摩訶薩、復た仏に白して言う、世尊、般涅槃とは何等の法を説いて謂いて涅槃となすや。仏、大慧に告ぐ、一切の自性の習気、藏・意・識の見の習、転変するを名づけて涅槃となす。諸仏及び我が涅槃は、自性空なる事の境界なり。復た次に大慧、涅槃とは聖智自覺の境界なり。断常の妄想、性と非性とを離る。云何に非常なる。謂う、自相と共相なる妄想断たるが故に非常。云何に非断なる。謂う、一切の聖、去來現在に自覺を得るが故に非断。大慧、涅槃は壞ならず死ならず。若し涅槃して死せば復た受生相續すべし。若し壞せば応に有為の相に墮すべし。是の故に涅槃は壞を離れ死を離る。是の故に修行者の帰依するところなり。
- (4) 卷二(分段81)「異教徒たちの涅槃觀」(T16:496a.16.20)。  
復た次に大慧、諸外道に四種の涅槃あり。云何なるを四となす。謂う、性の自性の非性なる涅槃、種々相の性の非性なる涅槃、自相の自性非性を覺る涅槃、諸陰自共相の相續・流注断たるる涅槃。是

れを諸外道の四種涅槃と名づく。我が所説の法には非ず。大慧、我が所説は、妄想の識滅するを名づけて涅槃となす。

(5) 卷三(分段105)

1 「すべての異教者の涅槃についての見解を離れるべきです」(T504c.1.065a8)。

爾の時、大慧菩薩摩訶薩、復た仏に白して言う、世尊、言う所の涅槃は何等の法となすや。名づけて涅槃となして諸外道各々妄想を起す。仏、大慧に告ぐ。諦聴せよ、諦聴して善くこれを思念せよ、汝のために説くべし。諸外道、涅槃を妄想す。彼の妄想に随順する涅槃は有るに非ず。(中略。二十三の見解を挙げて言う) 大慧よ、彼の一々の外道の涅槃は、彼等自ら論じ智慧もて観察するも、都て立つ所無し。彼の妄想の心意来去し漂馳・流動する如く、一切涅槃を得ること有るは無き者なり。

2 「私の言う涅槃とは、善く自心現のみと覚ることです」(ibid.8.17)。

大慧、我が所説の涅槃の如きは、謂う、善く自心現のみと覚知して外の性に著せず、四句を離れて如実の処を見、自心現に随つて二辺を妄想せず、撰と所撰とは不可得、一切の度量は所成を見ず、真実なりと愚かにも撰受すべからず、彼を棄捨しおわつて自覚の聖法を得、二無我を知り、二煩惱を離れ、二障を淨除し、永く二死を離れ、上上地に如来地にて影・幻などの如き諸深三昧に心意意識を離るるを、説いて涅槃と名づく。大慧、汝等及び余の菩薩摩訶薩、まさに修学すべし、疾く一切の外道の諸涅槃見を遠離すべし。

(6) 卷四(分段108) 「不生不滅が涅槃だと私は言う」(T16.507b.3.26)。

仏、大慧に告ぐ、我れ不生不滅を説く、外道の不生不滅に同じからず。所以は何ぞ。彼の諸外道は性の自性有りて不生不滅の相を得るも、我れは是の如く有無の品に墮せず。大慧、我れは有無品を離れ

生滅を離れ、性に非ず無性に非ず。種々の幻・夢現るるが如し、故に無性に非ず。云何に性無き。謂う、色に自性の相摂受無し。現は不現の故に、摂は不摂の故に。是の故を以て、一切の性は性無く無性に非ず、但だ自心現のみと覺つて妄想生ぜず、安穩快樂、世事永く息む。(中略)愚痴の凡夫は不 reality に墮して生滅の妄想を起す。諸賢聖は「さに」非ず。不如実とは、性の自性妄想せらるる如きは爾らず、異も亦爾らず。若し異に妄想する者も一切の性の自性に計著して寂靜を見ず。寂靜を見ざる者は終に妄想を離れず。是の故に大慧、無相の見は勝ざる。相の見には非ず。相は受生の因の故に勝さらず。大慧、無相とは、妄想不生、不起不滅、我れ涅槃と説く。大慧、涅槃とは、真実の義の如く見る、先に妄想の心・心数の法を離れて如来の自覺聖智を逮得する、我れ、是れを涅槃と説く。

以上所引の四卷本楞伽經に見られる涅槃論の存在は、この經が本格的な大乘の涅槃經として新たに出現したことの証左である。特に最後の箇所、本經が終始言及する「不生」が「涅槃」と同義だとすることは、注目すべきである。ここに我々は、法顯が命を賭けてインドから將來した大乘の『大般泥洹經』を自家薬籠中のものとした新しい大乘經の誕生を見る。それに加えて、肉食を禁ずる大乘經典のうち『大般泥洹經』の名を楞伽經の「不食肉章」第87偈が挙げないのは、大乘の『大般泥洹經』が新しい涅槃經として「楞伽アヴァターラ經」の形をとったことを、沈黙を通してブツダが公表しているということだ、と考へざるをえない。楞伽經の「不食肉章」は無用の長物ではなく、今や經の出自を明かす身分証明書だったのである。

楞伽經の「不食肉章」の、先行する涅槃經に対する沈黙を、偶然の過失ではないとして以上のように説明することは、しかしながら、いかに有力であるにしても所詮は一つの説明である。これに対して、五

世紀初頭にランカーの無畏山寺に集まっていた、歴史観、宗教観において当時一流の大慧者たちが、長安から中インドを経て独りランカーに入った中国僧・法頭の超絶的な願心に衝き動かされて、インド・パトリプトラから齎された最新の大乗『大般泥洹經』の研究を踏まえ、仏教内外の危機的状況を克服する方向を打ち出す努力を結実させて四卷本楞伽經という貴重な歴史的成果を産んだとすることは、資料の内容理解に裏打ちされた歴史解釈ではあつても、偶然性を孕んだ単なる説明ではない、と筆者は考える。

(二〇二三年、八月二十一日)

【注釈】

(1) 法顕訳、大乘の大般泥洹經で、四法品第八、四法の第三「能隨問答」の一例として不食肉が話題になる箇所(T12868c11:869b,17)を、対比の都合上「不食肉章1」と見なす。四卷本楞伽經では、問い三偈、長行、答え二十偈からなる經末の分段(T16513b22:514b25; Tokiwasa Division120)に不食肉のテーマを取り上げており、これを「不食肉章2」として、兩經の不食肉章の特徴を対比するために、漢訳の一部を訓読で示す。

不食肉章1

仏、迦葉に告ぐ、善男子、我れ今日より諸弟子に制す、三種の淨肉を食するを聽さず。及び九種の受、十種の肉を離れ、乃至自死は一も食するを得ず。所以は何ぞ。それ肉を食する者、もし行住坐臥するも、一切の衆生見て皆怖畏し、その殺気を聞く。(略)水陸空を行く有命の類、見て皆馳走す。(略)我れ因縁ある者に不食肉を制せり。今日は、因縁無き者に、大般泥洹を説くに因り亦復た制して応に食肉すべからざらむ。(T12869a,b)(文脈上、「今日」の位置を直前の文頭「我今日」から下に移動させた。常盤)

不食肉章2

仏、大慧に告ぐ、無量の因縁ありて応に肉を食すべからず。然れども我れ今まさに汝のために略説すべし。謂う、

一切の衆生は本よりいらい展転する因縁にて常に六親たり、親しき想いをもつての故に、応に肉を食すべからず。(略) 衆生、氣を聞いて悉く恐怖を生ず。(略) 復た次に、大慧、凡そ諸殺者は財利のための故に殺生し屠販す。(略) 彼の空行・水陸の衆生を取つて種々に殺害、屠販して利を求む。大慧、亦た教えず求めず想わずして有る魚肉無し。此の義をもつての故に応に肉を食すべからず。大慧、我れ時ありて説いて五種の肉を遮し或いは十種を制す。今、此の經において一切種、一切時に方便を開除して一切悉く断つ。(T16.513c-514a)

(2) 虎関師鍊(二二七八-二三四六)は、四卷本楞伽經の研究書『仏語心論』のなかでこの問題を取り上げながら、深く究明することはなかった。師鍊曰く(日本大藏經、方等部章疏三、五二三頁)、

問う、魏、唐二本、此の偈みな涅槃經の文有り。宋訳何故に之を収めざるや。(中略) 宋本略を好む。是の故に長行・偈頌に共に無し。只だ略するのみ。何の義の有らんや。(同書卷十八、第八十六)

師鍊のこの言葉にも関わらず、三本とも漢訳の偈は、五文字一句、四句二行、すべて二十文字から成り、宋訳だけが文字を略しているわけではない。漢訳三本の該当する偈は、次のとおり。

(宋訳)「縛象與大雲 央掘利摩羅 及此楞伽經 我悉制断肉」(T16.670.514b.6-7)

(魏訳)「象腋與大雲 涅槃勝鬘經 及入楞伽經 我不聽食肉」(T16.671.564b.20-21)

(唐訳)「象脇與大雲 涅槃央掘摩 及此楞伽經 我皆制断肉」(T16.672.624c.3-4)

この比較によって、宋訳が「涅槃經」の名を失念したのでなく、意図的に採らなかつたことがわかる。南条校訂梵本の該当偈は、唐訳と同じ。

hasṭikakṣye mahāmeghe nivāṅgūlimāike /

lankāvataraṣṭiṭṭe ca mayā māṅsaṃ vivaṅṅam //16// (Nanjio-edited text p.258, ll.4-5)

(3) HISTORY OF BUDDHISM IN CEYLON by Rev. Walpola Rahula, M.D.Gunasena & Co.Ltd, Colombo

Second Edition, 1966, p.85

(4)小論「如来威思想とは何か」(『禪文化研究所紀要』第三十五号、二〇二二年)、「七『宝性論』の『如来威経』解釈」で考察したように、凡夫の位における「如来の本性」が、如来となるべき胎児として、当の凡夫には知られずに潜んで「有る」と説明する。この説明は、それによって、『如来威経』と、そして研究者が抱きがちな「如来威」説とに、論理的な根拠の体裁を提供する。

(5)梁 (A.D.502-557)、扶南国三蔵・僧伽婆羅訳 (T14493a)。

爾の時、文殊師利復た仏に白して言う、世尊、若し肉を食するを得ば、象亀経、大雲経、指鬘経、楞伽経等の諸経は何故に悉く断つや。

下田正弘氏著『涅槃経の研究』春秋社、二〇〇〇年発行 (p.415) によってこの傍証の存在を教えられた。